本能寺本『芝草句内岩橋上』訳注

伊藤伸江・奥田勲

心敬には、和歌と連歌の自作をおさめた全八冊からなる集『芝草』があった。彼は、この『芝草』所収の自句、自歌にみずから注をつけ、弟子たちに適宜与えていた。『芝草句内岩橋』もそのような心敬の営為による一作品であり、現在京都の古刹本能寺に上下二冊が蔵せられている。本能寺本の上巻は、連歌の発句及び付句に自注をほどこしたものであり、下巻は和歌とその自注をおさめている。下巻の奥書に「文明第二暦初秋日於奥州會津　興俊大徳依頻競望白地註之左道〳〵　旅客隠士　心敬」と記され、文明二年七月、会津滞在中に、興俊（兼載）に送ったことがわかる。[注一] また、表題にある「岩橋」は、本書が奥州会津の地で成されたことを示すために磐梯山の古称である「岩橋山」の「岩橋」を添えたものであろう。

上巻と同内容の伝本として、太田武夫氏蔵の文明十一年写本と明応十年写本が存するが、下巻については、現在のところ他の伝本は管見に入らない。

心敬の自句、自歌解説は、彼の創作を理解するうえで最も重要な指標であるが、これまでのところ、この『芝草句内岩橋』は、本能寺本と太田氏蔵二本の計三本について横山重・野口英一両氏による翻刻[注二]が終戦直後に出され、本能寺本の影印が『連歌貴重文献集成第五集』[注三]に収められたのみで、その内容面の研究はいまだ進んでいない。そこで、伊藤と奥田は、この作品の重要性に鑑み、今回新たに翻刻と注釈を試みることとした。

注

注一、作品内にとりあげられた句・歌には、文明二年中秋以後、また文明三年春と推定される句、また文明三年五月の正徹十三回忌百首和歌からの歌があり、文明二年の奥書に疑問が呈された（『連歌貴重文献集成　第五集』（勉誠社・昭和五四）山根清隆氏解説）。この点は、奥書以後も若干の増補がなされたかと

推定されている（金子金治郎『心敬の生活と作品』前編第四章（桜楓社・昭和五七））。

注二、横山重・野口英一校訂『心敬集　論集』（吉昌社・昭和二一）。

注三、金子金治郎編『連歌貴重文献集成　第五集』（勉誠社・昭和五四）。

【凡例】

一、底本は本能寺蔵『芝草句内岩橋上』である。対校本は、太田武夫氏蔵文明十一年古写本（文明本）、同じく太田武夫氏蔵明応十年古写本（明応本）の二本である。しかし、現在両本の閲覧が困難な状況にあり、両本との対校は原本によってはなしえない。したがって、両本は横山重・野口英一校訂『心敬集　論集』（吉昌社・昭和二一）の翻刻に依ったので、不審な点はその旨を注記した。略称として文明本は「文」、明応本は「明」とする。

一、翻字本文は、本能寺本を厳密に翻刻し、原文の表記の誤りかと考えられる箇所には、校注者が〈　〉書きで「ママ」と注した。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記に改め、必要に応じて濁点を付し、句読点を補った。改めた仮名遣い部分は、文字の右横に小字にて原文を示した。翻字本文を適宜参照されたい。原文の表記の誤りかと考えられる箇所は改め、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が（　）書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いた。

一、注釈本文の各句には、便宜上、校注者による通し番号を付した。

一、訳注においては、【校異】、【他出文献】、【語釈】、【現代語訳】の項目を設け、必要な場合には【考察】【補説】等の項目も設けた。

一、【語釈】にあげた和歌、連歌、歌論、連歌論などの引用は、後述引用文献に依る。読解に有効と考えられる場合には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。引用にあたっては私に濁点を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改めた。

【翻刻】

芝草の道のくち葉ともひろひ
給て色なきことのおほつかなさとも
たつねたまひ候ひとへにその席の
とゝこほりぬるをおきぬひ侍る
はかりなれはさらに落つき侍らぬ
事のみなるへく哉又は此句ともに

かきらす愚作のみたりかはしさの」
ふしむは悉はへるへきをいまめか
しくことにふしくれたちかまひす
しき物ともしるしいたし給へる
かつはうたてしくかつは心あさく哉

【校異】

くち葉―朽葉（文）、くちは（明）　ひろひ―拾ひ（文）　なきこと―なき事（文）　おほつかなさとも―おほつかなさをも（文）、おほつかなきを（明）　たつねたまひ―尋給（文、明）　ひとへに―偏に（明）　その席―其席（文、明）　おきぬひ―置侘（文）　はかり―計（文、明）　さらに―更に（文、明）　落つき―おちつき（文）　事―こと（明）　哉―や（文、明）　句とも―句共（文、明）　ふしむ―不審（文、明）　悉はへる―こと〳〵く侍（文）、こと〳〵く侍る（明）　いまめかしく―今めかしく（明）　ことに―殊に（文）　いたし―出し（明）　哉―や（文、明）

【本文】

芝草の道の朽ち葉ども拾ひ給ひて、色なきことのおぼつかなさども、尋ね給ひ候ふ。ひとへに、その席（むしろ）のとどこほりぬるをおぎぬひ侍るばかりなれば、さらに落ち着き侍らぬ事のみなるべくや。

　または、この句どもにかぎらず、愚作のみだりがはしさの不審は悉（つくし）侍るべきを、今めかしくことにふしくれだち、かまびすしき物ども記し出だし給へる、かつはうたてしくかつは心浅くや。

【語釈】

○芝草…イネ科の雑草の総称。葉が細長く、穂をだす。芝。「こほりかさねおきそふ霜の芝草はふみならすべき跡だにもなし」（百番歌合応安三年～永和二年・路霜・七・三位）。「まよふ程身にも覚ゆる恋の道／芝草たかし人のこぬやど」（顕証院会千句第二百韻・八三／八四・忍誓／宗砌）。「芝草の道」は、元来、雑草の生えた荒れた道であるが、ここの「道」は、めざしても実りのない自らの和歌・連歌の道（敷島の道）をさす。その道に残されているこれまで詠んだ稚拙な自詠を「芝草」と卑下して表現している。作品集名も『芝草』としており、その場合も「芝草」は謙称の意を示す。その作品集の中から「朽ち葉」を拾うということになる。「世にしげき言の葉見ばや敷島の道の芝草夏に逢ふまで」（草根集・路夏草・一四八二・永享二年六月八日詠）。「敷島やわれ七十年の春もいぬいつ露わけん道の芝草」（松下集・暮春路芝・九一〇）。○朽葉　朽ちた落葉。こ

こは自身の詠作を卑下して言う。心敬の念頭には次の定家歌があったか。「つれもなく猶すみのえに手向草ひきすてらるる道のくちばを」（拾遺愚草・承元二年の秋、少将具親三社にて歌講ずべきよし申し中に、住吉・二八九五）。○色なき　風情のない。枯葉が色あせていることと、自身の詠草に風趣がないことを重ねる。「老いの行方よ何にかからむ／色もなき言の葉にだにあはれしれ」（水無瀬三吟百韻・二二／二三・宗祇／肖柏）。○　席（むしろ）　連歌の会席。「大むね、指合・嫌物はその席によるべく哉」（ささめごと（改編本）・末）。○おぎぬふ（補ふ）　「おぎなふ」の古形。不足したところを足す。○みだりがはし　乱れて不愉快だ。○ふしくれだつ　表現がごつごつしていること。「言葉ふしくれだちつまづき、姿太りあたたかなる句のうちには、ありがたく侍るべし」（ささめごと（草案本）・本）。

【現代語訳】

まるで芝の生えた荒れた道に落ちた枯葉を拾うように、私の拙い集『芝草』から下手な作品に目をとめてお取り上げになり、風情がなくて、不審に思われる点をおたずねになられます。私の作は、ただひたすら連歌の会席が停滞してしまっているのを、出して補っただけの句でしたから、一向にしっくりしないことばかりではないでしょうか。

またそれは、この句どもに限ったことではなく、愚作の不都合な出来の、そのいぶかしい点は充分に明らかにすべきでございますが、目新しくて、とりわけごつごつしてうるさい句を書きだしておられますのをみると、好ましくないことども感じ、また心浅いとも感じることでしょう。

【翻刻】

此暮をたにたのまぬはかりの世の
中に跡なしことの筆のすさみ
落ちり侍らは道に執心あるに
見え侍らんもほいなくてさま〴〵」
いなみ侍ともしゐてのあやにく度、
なるをむなしくかへし侍るも
かへりてつみふかく又はひとへに
たわことのみにしつみ侍らむも心
くるしきまゝをろかなる心の
一すちをしるし侍る斗也

【校異】

たのまぬ―またぬ（文、明）　世の中―世中（文）　すさみ―すさひ（文）　落ちり―おち散（文）、落散（明）　ある―有（明）　ほいなくてさま〴〵いなみ侍とも―ナシ（文）、ほいなくて様〴〵いなみ侍とも（明）　しゐて―しひて（文）　つみ―罪（明）　ひとへ―偏（明）　たわこと―たは事（文）、たはこと（明）　侍らむ―侍らん（文、明）　をろかなる―おろかなる（文、明）　一すぢ―一筋（明）　斗―計（文、明）

【本文】

この暮れをだにたのまぬばかりの世の中に、あとなしごとの筆のすさみ、落ち散り侍らば、道に執心あるに見え侍らんも、本意なくて、さまざまいなみ侍れども、しひてのあやにく度々なるをむなしくかへし侍るも、かへりて罪深く、又はひとへにたはごとのみにしづみ侍らむも心苦しきまま、おろかなる心の一すぢをしるし侍るばかりなり。

【語釈】

○この暮れをだにたのまぬ　この今日の暮れのようなわずか先でさえ、生きていると確信することはできない。「たのまぬ後の夕暮れの空／身を思ふ鐘には明日の声もなし」（心玉集・雑・一四六四／一四六五）。「暮れ」「世の中」を用いると恋のイメージも添う。○あとなしごと　とりとめのないこと。「あとなしごとになれるあらまし／かけこしは夕べの雲を契りにて」（竹林抄・恋上・七〇六・智蘊）。○筆のすさみ　筆にまかせた手慰み。「つれづれのあまり、古き連歌の付句をあつめて、それに又おろかなる心に思よりたる一はしを筆のすさみに書き侍りて」（筆のすさび）。○執心　執着心。○しひて　無理に。原文表記「しゐて」を本文では「しひて」に改めた。○あやにく　にくまれぐち。心敬の歌句に対する不審。批判。

【現代語訳】

この今日の暮れまで生き延びることさえもあてにならない、そんなはかない世の中に、とりとめのない手慰みの書き物が世にもれて広まったならば、この道に執着心があるかのように思われることも不本意で、さまざまにお断りして来ましたが、何度も、たってのこととして言われるご不審にそのまま何もお答えせず返しますのも、かえって罪深く思い、あるいはお答えした時には、ひたすら意味のない言葉ばかりで終わってしまいますのも、心苦しく思うまま、私の不十分な考えの一端を記すばかりなのです。

【翻刻】

此道は
ひたすら冷煖自知無師自語（ママ）のうへに侍れはいかはかり秀逸名句もことはりをときこと葉にあらはせは裳に落侍るなと、先人も申侍りいはんやつたなくあさはかの塵ともことはり侍らんはかたはらいたきこと也露はかりもあたるへきにあらすた、餘人所不見言亡慮絶のさかゐなることををのれとさとりしり給はすはちからなき」ことのみなるへしまことに斉桓公の文道をまなひしを車作おきなとやらんの難し侍るもことはりならす哉　」

【校異】

自語―自悟（文、明）　うへ―上（文、明）　秀逸―秀句（文）　こ

とはりをときこと葉にあらはせは―ことはりをときことはにあらはせは（文）、言葉にときことはりにあらはし侍れは（明）　裳に落―裳とをち（明）　ことはり侍らんは―ことはり侍らん（明）　かたはらいたきこと也―かたはらいたき事也（文、明）　あたるへきにあらす―あたり侍へきにもあらす（明）　餘人所不見言亡慮絶のさかゐ―余人所不見云亡慮絶のさかひ（文）、餘人所不見言亡慮絶のさかひ（明）　こと―事（文）　をのれと―をのれに（文）　ちからなきこと―ちからなき事（文、明）　なるへし―成へし（文）、なるへくや（明）　まことに―誠（文）、誠に（明）　斉桓公―斉の桓公（文）、斉恒公（明）　文道を―文道（文）　車作おきな―車作の翁（文）、車作翁（明）　とやらんの―とや見んか（文）、とやらんか（明）　難し侍るも―難し侍る（文）　哉―や（文）、や、一見之則可被成煙也（明）

【本文】

この道は、ひたすら冷煖自知無師自悟のうへに侍れば、いかばかり秀逸、名句も、ことはりをとき、言葉に表はせば、裳に落ち侍るなどと先人も申し侍り。いはんやつたなくあさはかの塵どもことはり侍らんは、かたはらいたき事也。露ばかりもあたるべきにあらず。

ただ余人見ざる所、言亡慮絶の境なることを、をのれと悟り知り給はずは力なきことのみなるべし。まことに斉の桓公の文道を学びしを、車作のおきなとやらんの難じ侍るもことはりならずや。

【語釈】

○冷煖自知　水が冷たいか暖かいかは、自分で手を入れてみてわかるように、悟りは他人から教えられるものではなく、自ら体得するべきものであること。「されば、いかばかりの聖教・抄物に眼をさらせるも、冷煖自知の所なくば至りがたしとなり。」（ささめごと（草案本）・末）。○無師自悟　師に教えられることなく自然と真性を悟ること。「世縁、俗念止み、重昏以て除こほり、静かに明なる心の上に、人の教へを待たずして、知らるる所あるべし。無師自悟の智とも、自然の悟とも云ふはこれなり」（沙石集・巻五末ノ六・哀傷之歌の事）。「これらの秀歌、まことに法身の體・無師自悟の歌なるべし。詞にはことわりがたかるべし。」（ささめごと（草案本）・末）。○裳に落ち侍る　品格がなくなる。俗にくだけてしまう。「歌を言葉にていひあらはし候へば、いかばかりの秀逸さへ、裳におち無下になり候、と古人申候」（寛正四年百首奥書）。○かたはらいたし　気恥ずかしい。決まりが悪い。○あたる　まさしく該当する。○言亡慮絶　言葉で言い表そうとしても表現できず、思慮によって思いはかろうとしてもできないこと。○桓公　中国春秋時代の斉国の君主。○車作りのおきなとやらんの難じ侍る　『荘子』天道編に存する、書物を読んでいる桓公に向かい、車作りの翁が、道の真意は書物では伝えることはできないと言った話をさす。『八雲御抄』巻六にこの話を引き、「歌も又是におなじ」と述べている。「斉桓公の文を学べるを車作翁が難じて、先人の心をば学ては得べからずといへるとなり」（ささめごと（改編本）・末）。

【現代語訳】

この道は、ただもう「冷煖自知、無師自悟」というように自ら体得し、自然と理解する道ですので、どれほどのすばらしい作品、名句でも、その道理を説いて、言葉に表現すれば、品格がなくなるなどと先人も申します。

まして、拙く浅はかな塵のような私の句を説明しますのは、恥ずかしいことです。ほんのわずかでも的確に説明できるはずなどありません。ただ、他人が気づかない所、言葉で言いあらわそうとしても言えず、思いはかろうとしてもできないその境にあることを、自然とおわかりになりご理解なさらなければ、どうしようもないことばかりでしょう。

本当に、斉の桓公が文の道を学んでいたのを、車作りの老人であっ

【本文】

発句

一、あらたまの枝折りえたる今年かな

この心は、蓬来宮に玉の枝とていみじき宝侍り。あらたまの年を待ちえたるにたとへて節（をり）えたるといへり。光源氏の絵合の所などにひく事なり。

【語釈】

○蓬萊宮　蓬萊は中国の伝説上の仙境。『列子』によれば、渤海の東の海にある山で、すべて金銀珠玉でできている。そこには仙人のすみか蓬萊宮がある。「（かぐや姫）「くらもちの皇子には、東の海に蓬来といふ山あるなり。それに、銀を根とし、金を茎とし、白き玉を実として立てる木あり。それ一枝折りて賜はらむ」といふ」（竹取物語）。○あらたまの　「年」もしくは「春」にかかる枕詞。ここは「玉」の縁から「枝」を続けている。「露深き秋のよもぎが島かげに玉の枝こそはなさきにけれ」（柿園詠草二・秋海棠のうた・九五二）。○節（をり）えたる　その季節を迎えている。「折りえたる」と「節（をり）えたる」を掛けた表現。「季冬（しはす）の節（をり）にして、風亦烈しく寒し」（允恭紀・元年（訓読文））。○光源氏の絵合の所　『源氏物語』絵合の巻に、竹取物語と宇津保物語の絵の勝負の場面があり、そこで「車持の親王の、

たか、それを非難しましたのも道理でないでしょうか（いや、道理でありましょう）。

【翻刻】

発句

あら玉の枝おりえたる今年哉

この心は蓬来宮に玉の枝とていみしき宝侍りあら玉の年を待えたるにたとへて節えたるといへり光源氏の絵合の所なとにひく事なり

【校異】

おりえたる―折えたる（明）　今年哉―ことしかな（文）　此心―この心（文）、此句心（明）　宝侍り―宝あり（文）　あら玉―新玉（明）　節えたる―折えたる（文、明）　所―ところ（文）　ひく事―さま〴〵に引事（明）

まことの蓬萊の深き心も知りながら、いつはりて玉の枝に瑕をつけたるを、あやまちとなす」と評されている。「絵たけとりのおきなうつほ物語名なり」（光源氏一部連歌寄合・絵合）。心敬が初心者に教えるにあたり、『竹取物語』原典の記述というよりは、有益な知識として『源氏物語』の巻にある場面を教えておくという姿勢が見られる箇所であろう。

【他出文献】

心玉集（静）六三八、心玉集（野）二（第二句「おりみたる」）、芝草句内発句七

【現代語訳】

発句

初春のこの時を迎え、まるで蓬萊にある美しい玉の枝を折りとることができたかのような、すばらしい今年となったことよ。

この句の意味は、蓬萊宮に玉の枝といってすばらしい宝がございます。新年を待ちわび、やっとその時となりえたことに、蓬萊のすばらしい玉の枝を折りとるということをたとえて入れて、「節（をり）えたる」といっている。光源氏の物語で、絵合の所などに引くことである。

【翻刻】

見ぬ嶋はさそな蓬か庭の春
　わかよもきあさちにふりたる庭なとたに
　春はなにとなくえんに侍れば蓬萊の
　嶋はいかはかりめてたく侍るらんと也　」

【校異】

蓬―よもき（文）　あさちに―あさちか（文）、か原の庭（明）　なと―〇（なし）（明）　何―なに（文）　侍れは―侍□に（明）　はかり―計（文、明）　めてたく―目出たく（明）

【本文】

二、見ぬ嶋はさぞな蓬が庭の春
　わがよもぎ浅茅に古りたる庭などだに、春はなにとなく艶に侍れば、蓬萊の嶋はいかばかりめでたく侍るらんとなり。

【語釈】

○見ぬ嶋　見たことのない嶋。ここは蓬萊の嶋。「おぼつかなきはただ船のうち／目にも見ぬ蓬が嶋を名に聞きて」（行助句集・一九〇五／一九〇六）。○蓬が庭　蓬が茂った荒れた古庭。蓬は山野に自生するキク科の多年草であり、荒れて古びた庭や邸宅の形容に用いられる。「露を見よ蓬が庭は花もなし」（芝草句内発句・秋・二六六）。「なれし月さへうとくなるころ／人は今蓬が庭に秋ふけて」（園塵第一・恋・五四九／五五〇）。○浅茅　丈が低いチガヤ。蓬と同じく荒れた場所の形容に用いられる。「霜に虫なく声の寂しさ／人とはぬ浅茅が庭に日は暮れて」（竹林抄・雑上・一二四七・賢盛）。○艶に　何とも言えず美しく。優美で。○蓬萊の嶋　蓬萊山を海の中の嶋と見ての呼称。

【他出文献】

心玉集（静）六四八、心玉集（野）一二（初句「とほしまは」）、芝草句内発句一〇、芝草内連歌合（天理）二五四八、芝草内連歌合（松平）一三

【現代語訳】

見たことのないあの蓬萊の嶋は、春にはさぞ美しいことであろうな

あ。私の蓬の生えた古庭でも春になれば華やいでいるのだから。自分の家の蓬や茅が生えた古い庭などでさえも、春になれば何となく美しいのだから、蓬ならぬあの蓬萊の嶋は、春にはどれほどばかりすばらしいことでしょうかと（いうことである）。

【翻刻】

年をのみつむ敷しまのわかな哉
わか哥の道のとしをのみかひなくつみて
いたつらなることをしきしまのわかなとそへて
心懐をのへ侍るこゝろなり

【校異】

年―とし（文）　しま―嶋（文、明）　わかな哉―若菜かな（文）、若菜哉（明）　わか―我（明）　とし―年（文）　かひなく―ナシ（明）　いたつら―徒（文、明）　こと―事（文）　とそへて―によそへて（文）、といへるつゐてに（明）　こゝろなり―心也（文）、計也（明）

【本文】

三、年をのみつむ敷嶋の若菜かな

わが歌の道の、年をのみかひなく積みていたづらなることを、敷島の若菜とそへて心懐を述べ侍る心なり。

【語釈】

○年を積む　年を重ねる。「積む」と「摘む」とを掛ける。「沢におふる若菜ならねどいたづらに年をつむにも袖はぬれけり」（新古今・春上・若菜・藤原俊成・一五）。○敷嶋の　本来は「大和」にかかる枕詞。ここは「道」にかかる意味を持ち、「敷島の道」すなわち和歌の道の略。「敷島の若菜」は連歌的な省略表現といえる。「敷島の道のほかにも春の野の広き雪間につむ若菜かな」（為富集（持為）・野若菜・三）。○若菜　新春に摘む菜。○心懐　心に思っていること。

【他出文献】

心玉集（静）六四四、心玉集（野）八（初句「とほしまは」）、芝草句内発句一一

【現代語訳】

年のはじめには若菜を摘むが、今新たな年を積み重ねたことよ（しかし年を積んでも一向に上達しない、この私の和歌の道であることだ）。

私の歌の道は、稽古を重ねた年月だけがその甲斐もなく積み重なって、むなしく上達しない。そのことを、「敷島の若菜」と詞を添えて、心中の思いを述べました、そういう句意なのである。

【引用文献典拠一覧】

和歌の引用は原則として『新編国歌大観』により、『草根集』は『新編私家集大成』本によった。また、『万葉集』の歌番号は西本願寺本（旧国歌大観番号）によっている。

顕証院会千句…古典文庫『千句連歌集二』（昭和五五）所収内閣文庫本

筆のすさび…『連歌論集三』（三弥井書店・昭和六〇）

沙石集…新編日本古典文学全集『沙石集』（小学館・平成一三）

ささめごと（草案本）…日本古典文学大系『連歌論集　俳論集』（岩波書店・昭和三六）

ささめごと（改編本）…『連歌論集三』（三弥井書店・昭和六〇）

寛正四年百首…新日本古典文学大系『中世和歌集　室町編』（岩波書店・平成二）

竹取物語…日本古典文学全集『竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』（小学館・昭和四七）

光源氏一部連歌寄合…古典文庫『良基連歌論集三』（昭和三〇）所収

銘感肝腑集鈔本

允恭紀…日本古典文学大系『日本書紀　上』（角川書店・昭和四二）

行助句集…『七賢時代連歌句集』（角川書店・昭和五〇）

芝草句内発句…『心敬作品集』（角川書店・昭和四七）

園塵第一…続群書類従第十七輯下